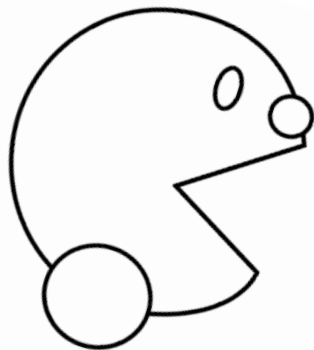




空気を食べるロボット — 空気から生まれる素材と循環を考える

メディア表現学部イメージ表現専攻
吉田蒼

着目した点

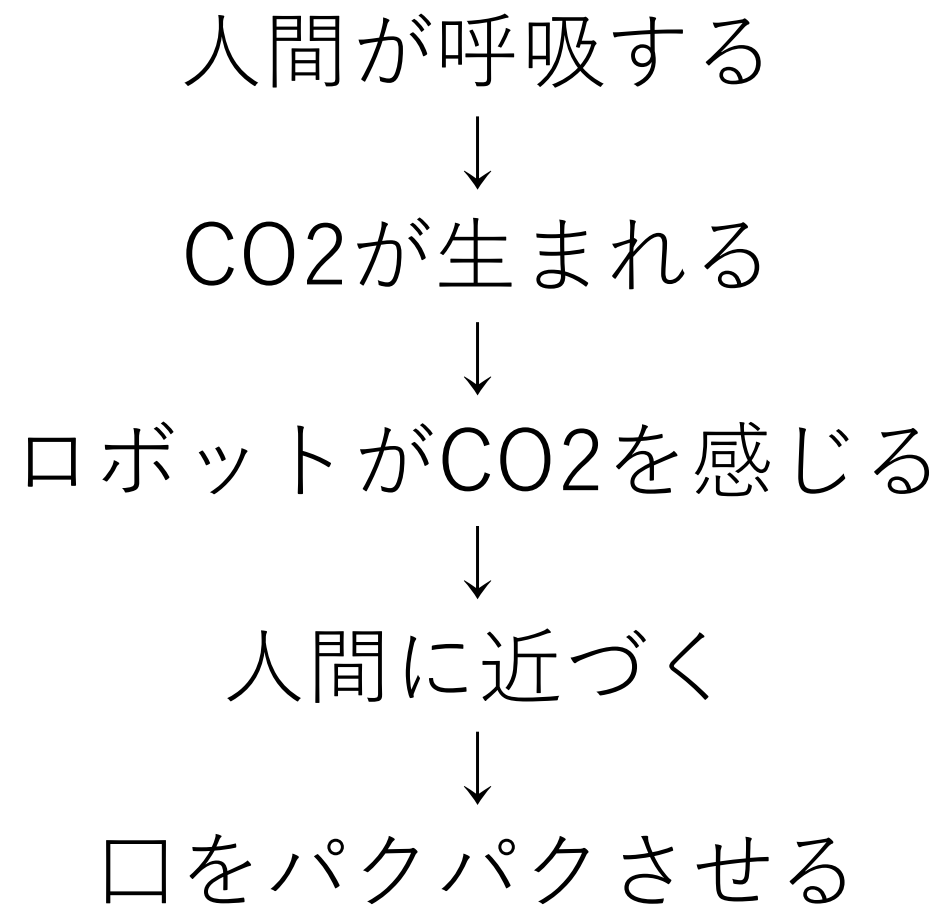
- 空気を材料として扱っていること
- 水などの資源にも配慮していること
- 環境分解性を持つ材料

表現案

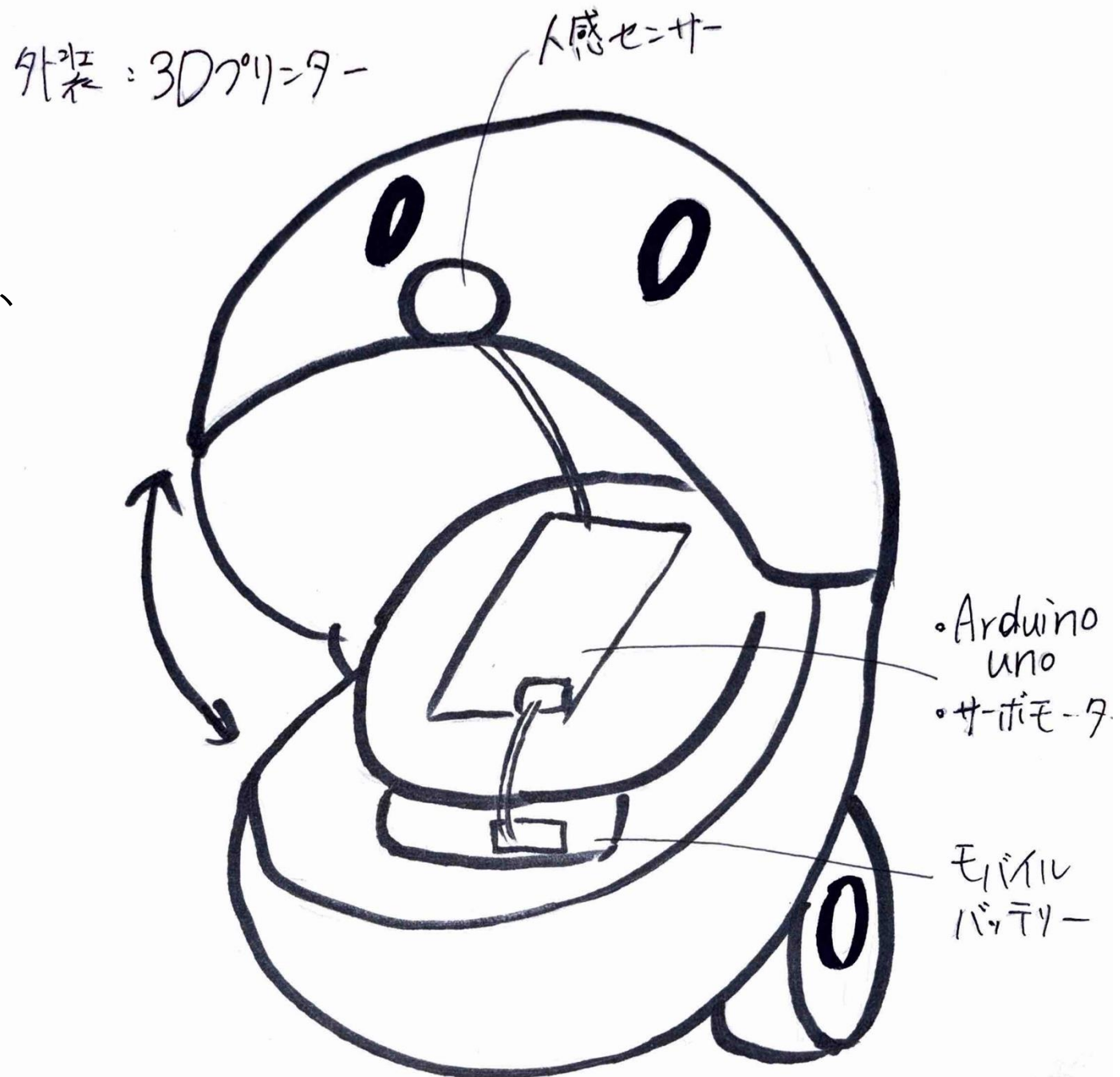


「空気を食べるロボット」

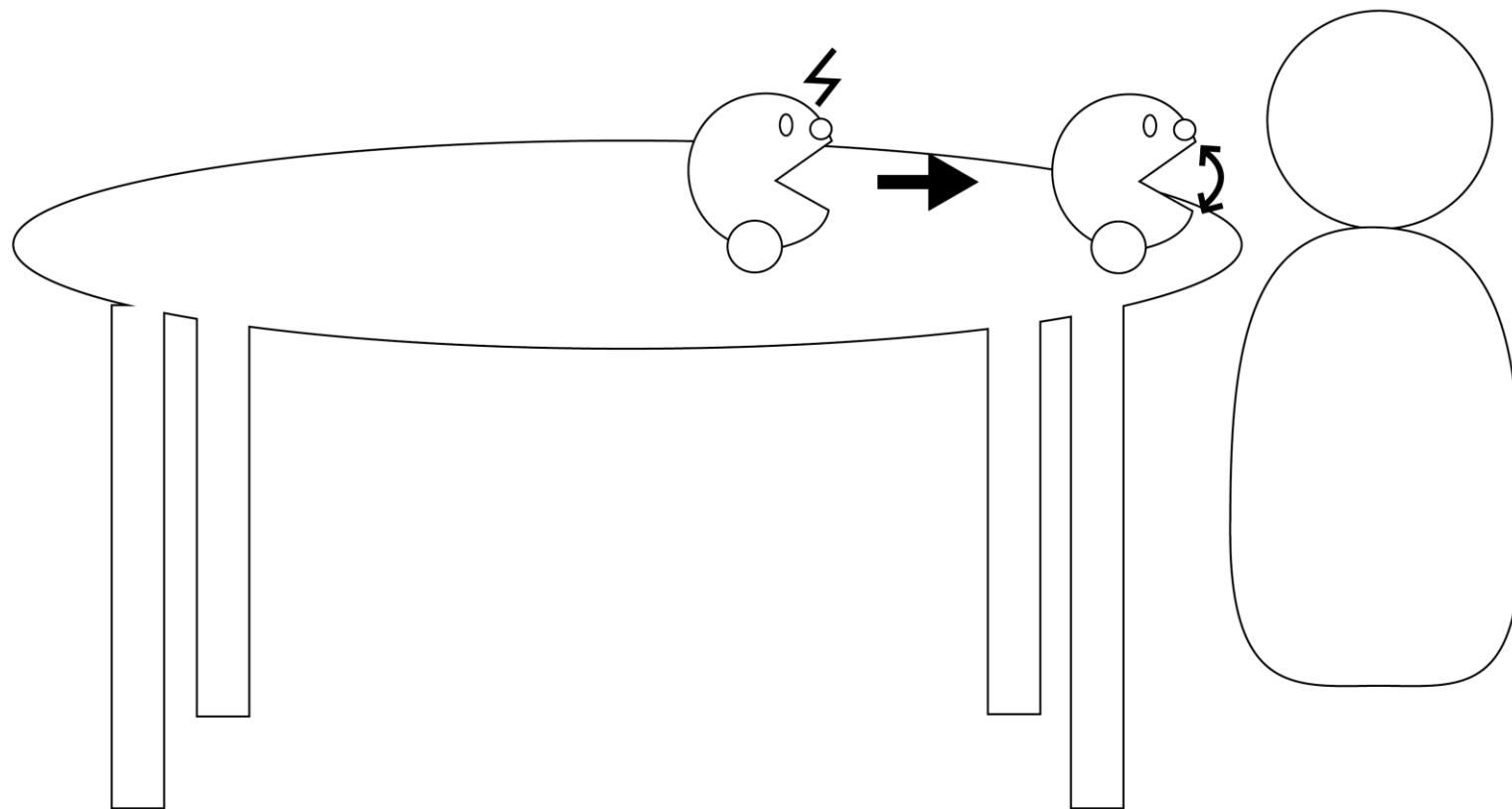
仕組み

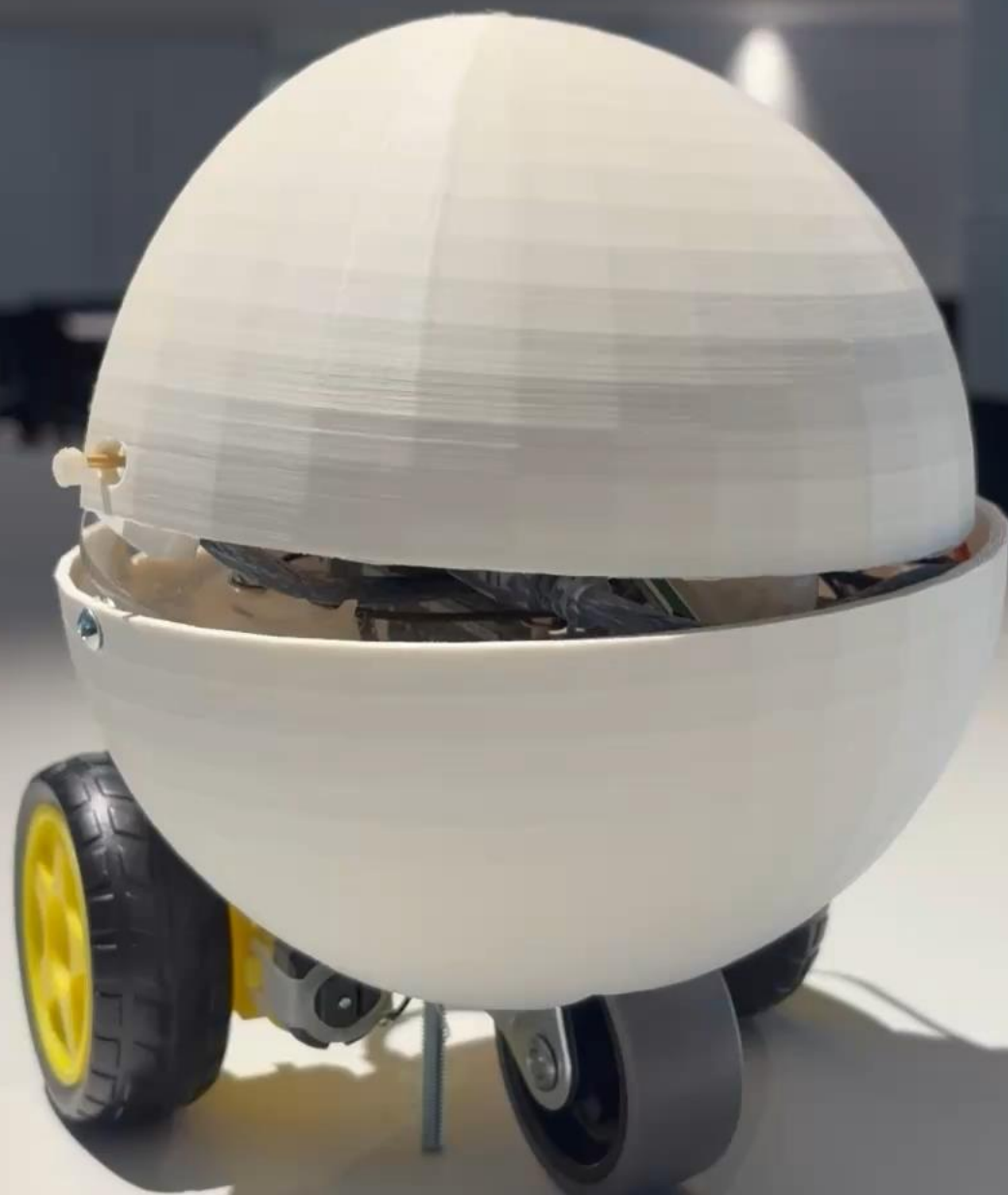


- 人感センサーによって人を検知し、人間に近づく。
- CO2センサーによってCO2の値が一定値を超えたら口をパクパクさせる。
- そして口を開け閉めすることで、空気を食べているような様子を再現する。

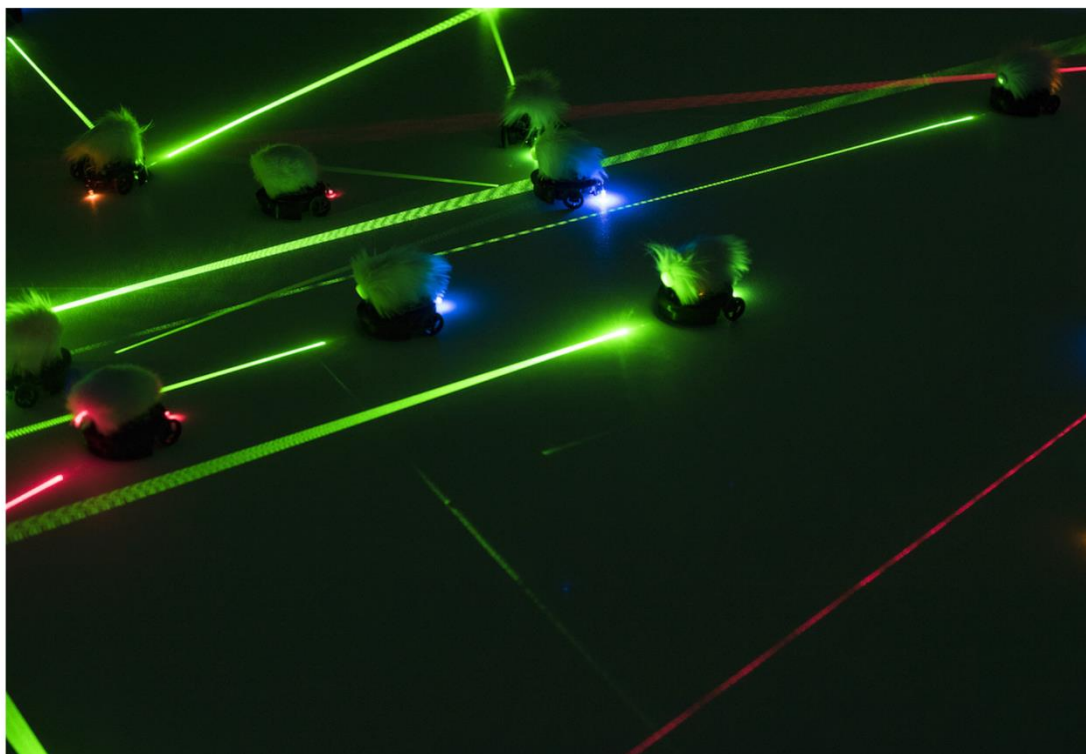


展示風景





先行事例



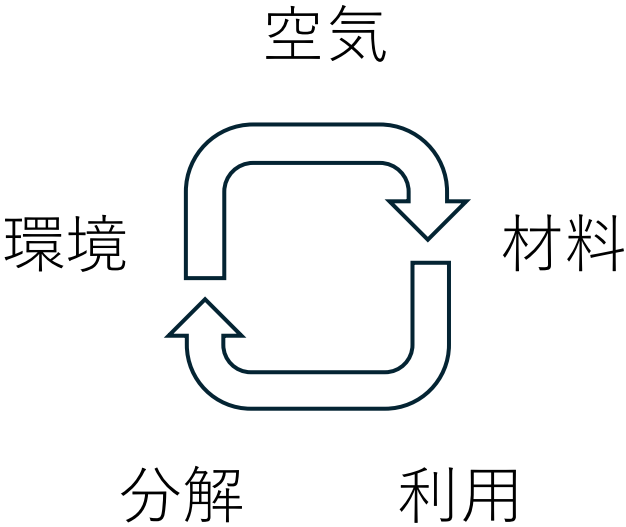
菅野創「Lasermice dyad」



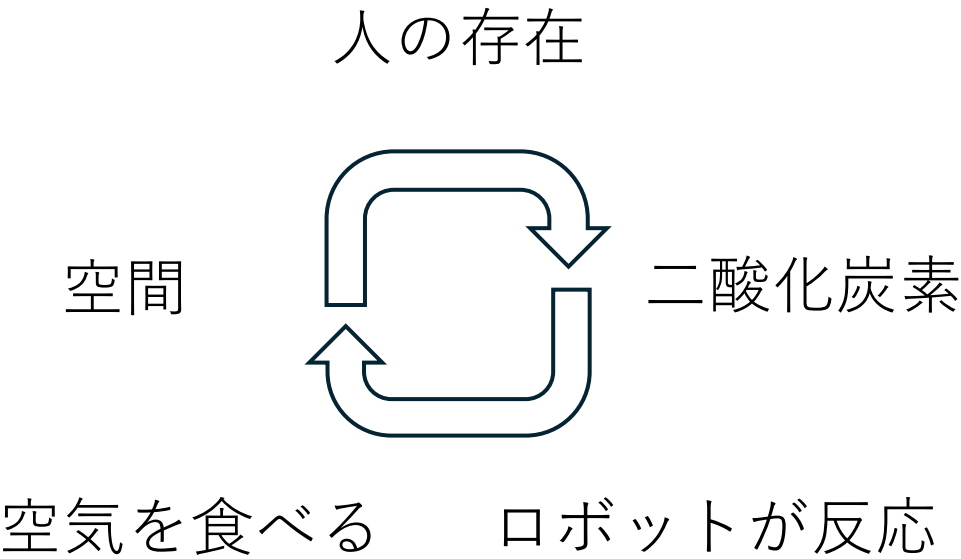
Sabrina Raaf「Translator II: Grower」

循環図

沼田先生の研究



空気を食べるロボット



この作品の独自性

ロボット = 人間を抽象化した存在

環境から何かを取り込みそれを利用する存在
人間が環境としてロボットに影響を与える
人間が環境に放出したCO₂を、ロボットが「食べる」と
いう関係に置き換える。

伝えたいこと

人間は環境から切り離された存在ではなく、
環境との循環の中に存在している。

沼田先生の研究から「循環」という考えに着目し、人間を抽象化したロボットとして表現した。

「空気を食べる」という行為を通して、人間と環境の循環を感じてもらう。